



七
柏
集

三

中村俊定文庫
文庫 18
574
4





乾坤佈真行



蒼海を初えそ芥子の咲ふり

蓼太

風多 旭乃 千舟すーき

牛歌

実人そ武士とるくく大鳥毛

鳥桂

との買子廊は纏そくちて

随賀

くれな乃西月小舟の尻と重

梅素

まゝ内取の砂も洗をん

太

二四

如^ウ有ハ女扇や取付人
新^ウく拭^ウ縁と髪鏡
裡^ウてもあらうくと老花を
研^ウくハ鏡るふり番匠
餘^ウ入の横不^ウ加^ウ象^ウ小^ウ六^ウ月
新^ウをうう層く摺を亡^ウ骸
志^ウぬ火^ウス^ウさ^ウち^ウも^ウ炬^ウを^ウ振^ウ也^ウ
筆^ウ菽^ウ北^ウと^ウ丸^ウと^ウ紙^ウあ^ウと

賀素歌太素歌桂賀

川揚⁺斗⁺小⁺鐘⁺の⁺菰⁺花⁺と
香⁺る⁺中⁺、⁺新⁺波⁺乃⁺飛⁺脚⁺待⁺と
月⁺花⁺と⁺妙⁺り⁺由⁺く⁺嵐⁺之⁺太⁺史⁺
た⁺お⁺と⁺女⁺あ⁺か⁺く⁺子⁺乃⁺物⁺杞⁺飯⁺
岡⁺伽⁺柵⁺乃⁺桶⁺ま⁺の⁺く⁺唱⁺蛙⁺
砥⁺と⁺りの⁺餅⁺通⁺子⁺岩⁺倉⁺
人⁺月⁺を⁺た⁺忍⁺心⁺車⁺の⁺捲⁺き⁺れ
う⁺し⁺と⁺侍⁺人⁺子⁺お⁺る⁺よ⁺ら⁺る

歌太桂賀素歌太桂

千所回ふた月もあつたをさき
 疫癘除の伝連よまき竹
 只ひとすかへりもあつたの旅をさき
 襟年隠しき討死の骨
 波あれの五合もあつた帆を舟
 空まきむ秋舟天城帰る
 西東指は月乃亭自振
 現洗ふきく星とがはれ

素賀太桂
 素賀太桂
 素賀太桂
 素賀太桂
 素賀太桂

つゆはあつた水もあつた
 夏とハルもあつたのあつた
 ははのさつた水もあつた山つた
 さつた水もあつた二日路
 玉川の船も折る志の者
 とお後くふ竹の管

太賀素桂
 素賀太桂
 素賀太桂
 素賀太桂
 素賀太桂

環流亭の菊

蓼

名葉よあやの世あかりとむ
 盃たえぬ月 志 朝 夕 一 兆
 初汐の擔桶浮をうり赤あそ
 驛路乃鈴ハ何の虫使 百 兆
 小刀も添き五出以硯箱 兆
 縮き下き鶴乃目く川里 太

愧進く門不結荷ま川繫了 兆
 流舟もとととと腰も才か中 兆
 湯如城も借き志津子成ま中 兆
 疾不あは流ハ流納や川た々 兆
 揚屋々々悉々園一片多より 兆
 年の貢と三尺乃雪 兆
 松ゆふ云云乃遷坐神下 兆
 和巾こはるく 銀 兆
 太 兆 兆 兆 兆 兆 兆 兆

色ハ又不通のなる押拭ひ
 且那ろゝひる記のたると
 妻の目と体尺度ねる母
 確る獲の鯉を福引
 する⁺列ぬ赤裳よさる女の童
 手燭透せたりひる君
 造化のひ^節もく玉子波
 比叡り健日ハあれ後山
 太 北 秀 北 太 秀 太

くらぬとそそを推る胸あは
 肩さる痛くみる國の海子
 海漬の罌子波織と米二俵
 又香黄ひる雪の義道
 組合く^る馬子とくれ
 干縮乃跡の臭き夕さき
 就^て月^は枕床儿持ある
 本草^の是^らかり^や
 太 北 秀 北 太 秀 太

十^ウ
 毛^ウ〜とを習もねよく旅裕
 事小唐大と船を〜里之
 笑〜氷も厨のときり庭
 ありと毎日何か一の存
 年〜小折もささひ花ハ云
 弥生々々川十分の春
 太 秀 北 太 北 我 北

孤猿洞真行

名如や雪のたぬもみなり
 心ら屋かをるる冬の夕暮
 塗指とと葉のさ〜と授とせ
 知行をの柄とよとさひ
 顔もた〜月乃一字掃ちり
 山寂寞と〜と〜と〜と
 太 阿 雪 貢 素 人 蓼 阿 蓼 太

言翁^ウみ出^ニ新^カを^クく秋の^ウ
町中^ウ年^ニて^テ何^カ屋^ノ時^ノ女^ノく
六^ツの^ウ湯^ノ送^ス小^ノ挑^ノ灯^ノ
麻^ノ鞆^ノ入^リ修^シ画^ノ師^ノの^ウ羽^ノ二^重
百^ノ遠^ノと^テ死^ノ度^ノと^テ交^ノ者^ノ
ま^ニく^テ糸^ノ動^ノの^ウ葛^ノ籠^ノつ^ウ鳥^ノ
恙^ノ危^ノと^テ相^ノを^テ入^リ積^ノ小^ノ和^ノ人^ノ
角^ノ力^ノ子^ノひ^とと^テ名^ノき^カつ^ウ男^ノ

太阿頁人阿太人頁

何^ノ市^ノ子^ノ神^ノ買^ノ子^ノあ^ニ世^ノ帯^ノ
と^クと^ク登^ノの^ウ隣^ノむ^ツま^ツ
双^ノ六^ノの^ウ簀^ノ一^ツ旅^ノす^ルは^ニ此^ノ者^ノ
尾^ノ乃^ハ出^リ線^ノま^ニと^テ仇^ノ指^ノ
酒^ノ倉^ノの^ウむ^ツ一^ツ腕^ノ子^ノ降^ノく^ツ
こ^ハハ^ハ化^ノ物^ノ乃^ハ火^ノも^トも^トり^シ
古^ノ花^ノも^トも^トある^ハ也^ノの^ウ云^フ年^ノ傳^ノ
飽^一は^ハい^ハ酒^ノ也^ノ賭^ノ

太阿頁人阿太人頁

悠然とる尾らききふしむる
かゝつて年のはなほも今
養育とていふは松入堂より
吉水院を荒茂者の宿
清らかなる小便りさくは足
根もや傷るいゝも人
吾の此月さへ入るゝも舟
もこれと暑き新編の舟
頁 人 太 貢 阿 太 人 頁

吾のいふつれも地を入遊交夜
山くおあむ小家百軒
さむしりふ牛車の本後干し
刀のさしつゝるゝのさし
糸持の仕舞草のさし
馬のあけく十軒のさし
頁 人 太 貢 阿 太 人 頁

芙蓉園真行

名月や流石の樂也船
 連る船のそとに由る岩
 風そよぐ小サ秋の露ちりく
 門守もとり履はきとみる
 出這入を奉別多る露の多
 沈小踵をよまを
 行騰
 芙蓉
 大命
 太
 扁
 太

竹持あゝき坐取るの祝若
 清赤くみきけりよ十枝香
 願て蠅を遊みけと笑く人
 憂夏の相をとりたる昔的
 さあけり弱を袂小忘来て
 起外到し物一の竿
 釣柿小馬を志る翁月相
 秋ひやあまゆきとる乃孫
 太
 扁
 太
 蓉
 扁
 太
 蓉
 扁
 太

旁しくれ後芝居の漏出く
 空を都と本曾乃山陰
 半子波精ハ遊れく志の雪
 ます、春風の君ハ十三
 十
 不やかハ記有るも永き日不
 穀 賀まくく小寐する帆柱
 何一歩の海立く唾のきく之
 帳垂火吹くもむもぬ大温房
 蓉 太 扁 蓉 太 扁 太 蓉

志の竹乃たをむ斗落く物、
 丘乃くくするお場あくそむ
 汲ひまを井の梅乃氷杓唾碎き
 草外をくく、文る庚申
 ちくくと珠の二存あり音ハ誰
 ひたもの嘆く、田舎儒者か
 人別の判をちくぬる豆の舟
 糸とる荳や新絵乃核
 全 扁 蓉 太 扁 蓉 太 扁 全

十一
 霜割の俄ナリあゝる秋の氷
 足ミを定ヨ喧ハんあり
 夏柄の雨イとらぬ極ス
 簾ノ獲ヲ阿モ摺シ
 二三日花のあき日をハ合せ
 風の去ル鐘ノ銀屏ノ帟
 大 落 太 扁 蓉

乾坤儀真行

神ノ人ノ之ノ時ノ静シくハ雲雀
 衣ノ中ノ乃ハ菜摘素摘
 室ノ食モ拂ス桂ノ々ノ々
 麻ノよシのシ澄ス小シ壺一打
 ちレをシ行ハまハさシ雨ノ月
 羽ノ之ノ亭ノ也シ弱ノ之ノ結
 蓼太
 才峨
 車童
 方壺
 悟牛
 太

新米年次食後心の三抔半
女ちのうら乃家小はるる
後う襦踏ききうのー
花袖折集家板入高
化那女をきを窓の燈をん
遷もあーは福原と倦く
うりく小月欠信のさみふ子
す金うの月六ト治一筑

壺童峨太牛峨童壺

十
簾う酒や太鼓小秋の夢
を江の湖乃只あまふ風
あま妻の夕顔く小窓うも
鏡お海ろり息うけさぬく
+ 妻を傾し石の唐櫃揺る
まの五軒家よとぬ新回
世三の療治新ひ去あう
老をまらふ雪乃

アミサケ
醴

壺太牛壺童峨太牛

人きく冬の轆^{ツクミ}入解ふ列く
安井あさりの古弓終く
行あさく古懸あさく一理居
猪酒鰻乃むく女房
中垣とき川と指南の小薙刀
大和あささく伊賀乃城下
照月のそ松障あささく線
俾おさ年あささく只若さく

童 峨 牛 太 童 峨 牛 壺

漸とあささくもの冬秋かり宛
るてさりなき非暗の由途
赤よさく波の七里乃溪ひさく
さえあささくあさ^{十元}いおく
あさかさく君乃花息を待斗
葦さくささく糸乃塵

童 峨 牛 太 童 執筆

櫻溪舎真行

蓼太

曉の日初ふたりぬる秋の夕

伊勢

顔さし一歩の管身乃月

理玉

田楽や新酒の町もをわけて

文母

海まじら細工乃糸子追々

牛飲

足輕の在所を評る友をを

阿人

年々稀ある雪の夕々逢

太

川もあられ降し小峰もはらり

玉

雲もく身とも去るぬお駕

母

市下さるるやわりの小坂を結ぶ

飲

四ッの土圭は奥乃出月さる

人

赤あけ乃巻巻をまると垂垂し

太

仙る袖より小刃さるる配當

玉

新鞍とく弟附る小堂の月

人

岩削とく戸田の秋あり

飲

遷宮ふまへてくるとま大工
小粒あつてつを八つとまたらう
とまよおまふの系拖繰延一
忘年笑ふと甲斐の山く
+ 信長の使者もよるに南無
是乃よか一乃あつ川珊瑚珠
棟上乃踏志とまると歌一
念佛子が一と坂もわく

母太人 玉飲 母太人 玉飲

今まの柳の腰と戯まら
火桶を源乃内侍ま一不
やると休と歌のはく日焼す
桂かけとある桂や鬼歯朶
一と降り同し松子ちや
船な夕帆をと虫五合祿宜
月の名も下ると位は一
車は牛子秋のみと

母太人 玉飲 母太人 玉飲

う
 とも来るともろくぬの書がれ
 安否の書もく僧のあはく
 唐紙の書もく何者ぞ
 年々をきて居るもあ
 望むも花もまきぬるもあ
 膚くの歌乃叔あはく

飲 太 母 人 玉 太

乾坤体真行

里人の書もく由來の月
 縮も思ひ乃穂よ出る時
 旅衣の書もく書分な
 振むけち又吹の書もあ
 樓年屋あく乃捲すきま
 うさくれなぬ子梅角の夕雲

蓼太
 車童
 牛歌
 烏桂
 方壺
 文母

索かゝる帆繩小童子夷とも
 かいほめつてふ物子傾城
 讀せしとまきれくの妹なご
 墓塚配る陳乃川際
 信し多福まき雪の陰たご
 あまひまきして葉小庭く穴
 走も又まきとまき一か利お
 扱を二棟ぬあまの月乃幾ふ
 随賀 悟牛 財我 梅素 桂 太 母 我

夏も今なるもあゆりの男や
 勅使たるかふくまぬ
 ころねりやまのり花の女
 世を糸柱の緒玉一尺
 こまきハ不ニをとるむ幼硯
 味嚼吸との小上坐さたまる
 鎖をとく浪小船形
 舌隠貸く面目も形
 素 壺 童 賀 牛 歌 賀 我

脊ホイ身シン不フ弓キウ矢ヤを推オシくク茶チヤ壺ウ
 昂ホウくクてテ麩フ斗ト中チュウにニ後ゴ
 公コウ妙ミョウ子シ只シ棹ソウのノあアとトらラりリ
 越エツのノ卯ウ月ツキ乃ノ今イマこコのノ海ウミ邊ヘ梅ウメ
 凡マン音オンのノ淺シヤンくク旅リョ屋ウヤ乃ノ多タ矣ヤ麻マ
 消シユウてテはハくク津ツをヲ新ニとト馬ウマ娘メ
 桂ケイ男ヲ乃ノいイつツとト三サン麻マ人ニのノ戲キ山サンとト
 焚ヒキくク碓ヱ石シヤクをヲ松マツ葉エフ推オシ柴ヤ
 飲イン 桂ケイ 百ヒャク溪シヤク 牛ウシ飲イン 母ボ 童ドウ 素ソ 壺ウ

蝶テフのノ出デるル片カタ乃ノれレ山ヤマのノ秋アキ乃ノれレ
 連レンなりニ一イツ馬ウマをヲとトりリ乃ノれレ人ニ
 天テン蓋ガイをヲ枕マク論ロンをヲきキくク是コトをヲ傳ツタへヘるル
 内ナイ籠カゴ越エツへヘ中チュウくクくク乃ノ龍リウ川ケン流リウ
 咲サイ花カ子シ缸カウよヨまマるル夕セキあアがガるル
 こコらラのノ西セイ乃ノ西セイもモ雲ウン風フウ
 溪シヤク 太タイ 飲イン 歌カ 牛ウシ 溪シヤク

1001

六

三巴齋真行

蓼太

白玉や木絨の糸流るひと川で
 山夕をえそく沢若の月 以鳴
 老の千シタ申汲さぬく小 牛飲
 折よく墨画二枚のくく 太
 駕かりそく及う傘ハ五匹や 鳴
 かつく枯る暮の裏町 飲

古来の温泉おねを産は早く後ひ合 太
 娘さうりもはひ葦子きり 鳴
 仇酒を伴とあそぶる二生友 飲
 入帆日和小糸もあゆも 太
 白くくの立寄りそく雲の峯 鳴
 始焚谷乃地獄をまう 飲
 体の子まうと葦ひら塔をまう 太
 網をうれの武士とらんえたり 鳴

いよあひの源八堤漕りかき
 小面平なり一総松の月
 獨漕、起る宿垂乃花北交
 妻此の河勢乃三里百壯
 得るまは、⁺室の河路乃古産相
 紀の山陰此一家死く
 白給るる強飯の新流義
 自利の底るる有る人あき
 飲 太 鳴 飲 全 鳴 太 飲

本陳の華も結り明をなま
 ちげ乃情の名さくすく
 大系を賽とらと勢あり
 貴厚き松の車候あり
 澄のなる顔はく油標舞
 引導あを味むれく
 不人の事と月代も塗際子
 守る相もき聖の御坐船
 飲 太 鳴 飲 太 鳴 飲 太 鳴

七
三

廿
九

深^{ナリ}色乃秋も付さるあ〜や毎
 五士衣の下ふじ〜り毎尚
 込入る積か〜新々疎川乾〜
 交代部屋の雨共は遠く
 今間の冷息さ〜花乃四里四方
 む〜り中閑き世時津風
 太 飲 鳴 太 飲 執筆

雪翹籠真行

蓼太

冬月此鏡練〜んさ川き園
 田毎〜あ〜花の螢火 鳴泉
 還幸乃先追守と松風平 杖芥
 阿比心葉も〜る所〜は〜 五嶺
 芥入る具是の解乃いとゆるる 鼻
 美れさしむきの氷ゆ〜い 太

三
三

三

藤々 船将 見也 此 御さくら
 唇 へすき みや 去 女房
 便 船 小 舟 系 履 乃 量 とも 路
 葉 舟 風 の 比 目 送 舞
 あ〜〜 日 と 笛 とも 透 へ 所 一 艾
 後 風 古 記 二 巻 とも 扱 へ 来 る
 斤 意 地 小 拍 あ〜〜 乃 大 氣 とも
 ま〜〜 へ へ へ 門 小 使 者 馬
 嶺 斧 太 鼻 嶺 斧 太 鼻 嶺

尺 上 へ とも 笈 と 手 履 々 圓 片 取 へ
 横 へ へ へ へ 月 の む 雨
 鴨 笛 乃 系 へ 鴨 へ 人 とも
 刺 とも 拵 へ 鬘 け へ 枯
 金 葉 小 尺 尺 の 尾 首 明 へ へ へ
 あ〜〜 つ へ 安 だ 雪 乃 勢 波 津
 糸 物 小 豆 花 鬘 者 の へ へ 神
 麦 小 へ へ へ 袖 へ へ へ へ
 嶺 斧 太 鼻 嶺 斧 太 鼻 嶺

母子傳とまねぬ様の腰まひり
 まゝの母慕ふ牛此翁より
 帆おろしてふる唐玉の胡弓
 かく一矢と尻たたく也
 酒酔を荷あて出る樽乃おと
 今や涙の長字よりまほ
 沈のる。月ふ妙小夕くれ
 掠るるるれ 雪乃海つ

嶺 阜 斧 嶺 阜 太 斧 嶺

高欄の肘ちやふより初
 飲立板下夜食何し
 十里歩くもや物足ぬ旅あふ
 山々さひさひ 嶺とらん
 おのれとまひり一木花整
 築地此の山々 行々たり

太 阜 斧 太 嶺 斧

翠月舎真行

蓼太

夜船や客の縁小紅走る屋
 月乃庭井よ夏忘きる
 魯洲
 松かーハ一むら此降持る
 流光
 存す不傳し供奉入をのく
 斑石
 是より小燈袋の如ーヤ紙
 季令
 桐橋かけー舟乃あより場
 月窓

鮫子干風のさむー久夏月
 湖
 戻りて三年系此爪あき
 太
 絶解く更小虫さる袖さる
 石
 いまや受戒乃盥剃刀
 光
 碎るる葉を此湖の九折
 窓
 先是代忠たさふまを
 令
 将くと月の桂乃瘦おと
 太
 佛徳入る椽此麩棒
 石

三十三

三十三

人^{ナリ}や阿^アと秋の間^{アキノマ}に^ニ光^{ヒカリ}
 浪^{なみ}を^をすれ^する^る安^{やす}宅^{たく}丸^{まる} 忘^{わす}
 夕^{ゆふ}風^{かぜ}の斜^{しや}子^こ房^{ぼう}る^る日^ひの^の返^へ
 心^{こころ}で^で能^よ者^{もの}と^と古^{ふる}く^くと^とよ^よる^る候^{こう}
 志^し志^しと^と一^{いつ}一^{いつ}若^{わか}麦^{あわ}少^{すく}て^てる^る石^{いし}拵^{ぢょう}
 流^{なが}生^{なま}く^くり^り始^{はじ}清^{きよ}も^も等^ら之^の 執^{しつ}筆^{ふで}
 光 忘 洲 令 石 執筆

雪丸舎真行

蓼太

一^{いつ}と^と路^ぢを^を月^{つき}を^をや^やり^りと^と進^{すす}む^む様^{さま}
 翁^{おきな}か^かか^かる^る翰^{かん}子^こ継^{つぎ}る^る 赤^{あか}花^{はな}
 秋^{あき}ま^まな^な麦^{あわ}振^ふ舞^まふ^ふ多^たく^く 百^{ひゃく}棧^{げん}
 足^{あし}駄^だて^て志^しの^のめ^めを^をた^たく^く 太^{たい}
 石^{いし}多^たく^くむ^む檣^{じやう}き^きよ^よか^かま^ま出^で来^来上^上り^り 花^{はな}
 甚^{しん}ま^まら^らく^くと^と重^{おも}い^いの^のぬ^ぬの 棧^{げん}

日糸乃唇へるる普門品 太
 男ふ〜心を母もともく 花
 在的 不射止事の袖なり何を 百爾
 卯 月て〜りの風の信を〜 太
 破と心〜焙煖より菓子昆布 花
 寮 付合乃 為さ〜子と枕 棧
 人〜麻の根と〜 太
 月〜 藤と〜 爾

朽く小舌〜川新海一糸 花
 馴〜中野の宿ハさ〜 太
 咲糸乃阿〜 棧
 漸も戸無浪+さ〜之〜 爾
 糸と〜二寸小〜 太
 古壺細工〜 花
 捕縄を〜 棧
 膽〜 爾

竹青も又よのハ乃らるれ就
 車かりねと牛のふ枝煙
 人頼ふたゝもぬ苔枯下まゝ川
 赤瘦 汗くく 兜めさ勢れ
 切糸の浮枝くねく毘毘はじ
 まゝ 飯殿ふらもる 神 流
 西ひーーろろ 魚月の柳角力
 舞路ろ川く小苔妻乃とと喰
 花 太 爾 花 棧 爾 太 花

十

二三を尋れ扇を掃 ちる字
 旭小をさきゆく大系回答
 系物の細代もあけ散とられ
 ちるくーくもひと川 高
 囊中の袋く酒買子花の袋
 人來といよきの路ね家
 棧 花 棧 爾 太 棧

雪丸舎真行

蓼太

初〜〜〜子も〜〜〜
 た〜一〜〜〜青海 百棧
 おも〜路乃人子城の縄なりて 赤花
 身とわ〜〜腰乃出供を公 太
 長雨〜〜漸育ぬれ舟か〜 棧
 前ち〜〜〜水不鞋の初布 花

昔川〜〜冷みて〜〜飯のぬき菜汁 太
 百里六日の駕よもた〜 棧
 夫子〜〜とる衣士入和衣も〜〜知す 花
 ちれを妻〜〜〜花〜〜翠簾〜〜 太
 おも〜〜ちき神楽乃火〜〜け赤志也 棧
 淡路河〜〜けゆく松乃ひま〜〜 百爾
 鯛〜〜〜鯛の味なき〜〜腰あ〜〜 太
 能〜〜〜ひま〜〜乃枕〜〜るなり 花

みる子何を記む物類
 春や紫胡小花乃谷く
 雪如月日乃五輪とら
 春まゝの流氷崩るに
 十
 舟の回小も思て奏者乃長袴
 裏入久孫平首途川する
 玉まはる本影さする管
 荒涼なる候よ如く
 爾 太 花 雨 太 花 機 爾
 太 機 花 雨 太 花 機 爾

糸の何を糸もよひのれ種
 又のささせき老るるはく
 孫文よ湯治のとも子運者ひとり
 食後乃謡多ハきく孫と
 くり出しく位牌せり同光忌
 厚背背書小月ハとらさ
 織多ふ色尺す暮乃蒲苙
 神小尾廻の鴨入く春不
 爾 太 花 機 爾
 太 機 花 雨 太 花 機 爾

十
 蒙求の法水と杜律乃ふ審紙
 四五本枕と窓よは君
 すれくよ浅草川の帆をふま
 十念より乃折りおとえ
 手くしと折らふ之花乃雪
 花
 花 爾 太 機 爾 太

石中堂真行

悠々乃牡丹ハ伽羅もるく
 酒をさるに旅の舟天府
 有久る車太乃羽織者多 富屋
 あやめ眼鏡を掛つて阿人
 牆越し喰ふをくる永き日下府
 地を揺るり雨乃やお吹 太

三十一

三十二

久き寺へ程よき多枝あり人
耳子海辞のなきて叶りぬ 屋
末彦の漢和乃湖子附篇一 太
たつよ山を越る雪雲府
瓦前より水多ぬくと後提 屋
免角法師乃骨打節 人
大津を送りの舞子五六人 府
お合加島と骨牌ほく如丸 屋

藪やちれ花と多も又花蓋 人
若乃腕も塚の古物 太
袖襷より月乃胡蝶の愛心 屋
醒ぬくと水は遠よる 府
+ 憂時ハ隠坐愛乃切目録 太
筆さく枯る書写此みされ 人
嫁婿と愛くれと惚ふくく 屋
囚りれ人の不定せん 太

かゝる板乃圓の東小あゝこそ府
坂遣寺いひよみ此流々
五十串の舟喜や久挿
彼を潜く小坊を屋
盤う一乃蕎麦を舌う左う
遠垣越よ本城刈里府
夕鴨子立捲きて月ひとり
九人の秋乃る去帳と縁
人太人

^{十ウ}
奇かゝる板子頭痛くらなる
まおよよらる海原の風府
あゝけ即貢乃魚の尺擗て
まゝ中流連乃新法多く
袖返しくく花の越天樂府
まゝ一ううきよまゝ入徳
執筆

望天樓真行

蓼太

山里や枕ふかけたる 臨者
 せしむら しくさくひむ 相亦 壽來
 陸比色よまの夕初を 願く 左良
 きの子乃る子 娘も子 面を 東席
 むる居てたもよ 枕もよの 秋落 歡丈
 龍之妹よ 舟乃玉 ねらる 太

道なき 貫の 駒を 奉る 来
 来 絶 ささね 風を 人 良
 友 徳を 人 心 青 席
 をの 命 法 陀 子 夫
 寺 ぬ 火 入 細 太
 義 理 有 娘 ね 来
 麻 々 れ 湯 漬 す 良
 手 燭 子 雪 雪 の 夜 光 序

廣庭に破船の濡荷積をく
酒入るゝ吼る荒夷も
三日月入半弓提て花の
まゝの赤芝
調布に笈すの里のさし杭
尺の子嬢の米とさくゆく
やまゝの十のさくさく
風呂敷うけく聖の蓮葉
来良太席夫来良夫

痛む時も久能と枕の伏見
七のくくと老ハゆきくと
盗人の窟に奥に居すれ
笈を甚勤と梅も梅と
着るゝゝゝ行衣入雨の乾之
とりのおさく粥入猫古
月明のや半竹く造后
きゝのちね珠の垣の
来席夫来良太席夫

三十一

三十一

棟木うらわけて氏子乃幸進扎
 ありととめてきこゆきと誓
 振舞も昔ありし此根来振
 う川より梅乃冬至よりきす
 何系と田中子孫を塚ひと川
 葉内まゝしん出 響はら
 月海へ待夜の依殿らとら惹
 ちろふ生つる暮の葉北角
 山 太 水 枝 太 舟 雨 山

船とくし帰るきこゆは縁迄
 関と名古曾乃手取た白く
 ちれと紐とく琵琶の花結ひ
 嗚呼とととせらと川も陽を
 奥箱の命去りしは春此の空
 午時を限り教射三千
 只今と別火の夕餉焚おろし
 川をりて青き藤乃飯暮
 太 山 雨 舟 枝 水 舟 雨 太

日くらみよきぬ瓶葉乃旅やほき
くまーい涙の福やあゆむ
裁板ふ緋綾去るあやしらうき
おもと暦乃冬ノ東風う
臨甕のやうく辛き銀夷はに
し川乃まゝなる帯解き糸る
二腰のくき無きかき菴此月
くのむー共喜乃おぬあぬ

枝氷雨舟太枝氷山

雪と降られてと玉露と並あゆり
連ゆりかへれ志賀の山越
むよよのあそとみ合ぬきほ
雨軟乃戸とやけ文ふさぎ
慶雲此花の古有それなう
心さ半仙よたとさ遊狂舞

枝氷山太舟雨

松濤亭真行

蓼太

今おのれと松の葉流る時雨式
 あけく冬きれ忘乃小面 吏中
 鳥帽子もさつとさかり酒酌て 子真
 いさ借る糸を足下なるとと 百鏡
 ありとや小絶くゆとひ橋の月 五麗
 西風をとらひ九く入庖下 宜参

伊勢在比若者掛ふ盆走ると
 手おふ朱柳の種古ひせく 太
 傷啼火と河ひ乃星あり 流
 天窓おせく薦小琳やれ 真
 露もきとふゆる妹脊乃風とる 麦
 旭さひしき筆に此初浪 繁
 境の果おとくうぬ第瓦を 真
 道安さくふ行足てな 中

神波とらき出仕乃々川口
 降きく雪と志の元日
 水あびる月此挂ると男
 妻やむうと角力とるん
 十
 たる多のむ来乃松山あけ多て
 門よりまゝせる 加馬此空輝
 鵜鴎も高ひ口をさく勢たり
 大のはあか出乃賢又屋千相
 太 麦 澆 奥 藤 澆 麦 太

身乃川小初夜と好おとの元哉
 波乃佃名鬼と住まて
 風のたふ時もすーき友燐
 おとく 心も左友さいと
 ちうとれも古むき記の曇華院
 井~~~~ふ、せと白上木樺
 三川長つ新月の待ふ人
 換る涼る大川沙乃舟
 澆 太 藤 中 奥 麦 中 藤

香^{ナウ}間^ウく^レ律^ク々^ク城^ノ乃^ハ塵^ニ氣^ヲ樓^ス
 日^ニ和^カお^の白^ク一^ニる^ニを^ハ今^ハ一^ニる^ニ
 あ^らわ^くな^るあ^らわ^く風^ノ好^クの^知く^ま
 市^ノき^とら^しゆ^れ魚^ノ屋^ノの^呼声^ヲ
 誰^ノ屋^ノ乃^ハ出^ル滄^々々^々人^ノ花^ノら^しぬ^く
 層^ノ云^ハあ^らわ^く人^ノの^三月^ノ
 繁^ニ 麦^ノ 真^ニ 太^ニ 中^ニ 浣^ス

東花房真行

蓼太

換^ル結^ス小^ノ日^ノ永^キき^スあ^のの^白泉^ノ式^ノ
 い^の川^ノう^ちて^は花^ノま^はら^しぬ^く乃^ハ月^ノ
 列^ノ見^ル北^ノ花^ノの^袂や^小の^花々^々人^ノ
 十^九や^七た^たら^し乃^ハ笑^ハ屋^ノの^さま^ま
 う^たれ^ぬあ^らわ^くん^をあ^らわ^くの^岩流^リ
 あ^らわ^くは^花屋^ノの^まま^まあ^らわ^くぬ^く
 夜^ノ兔^ノ 夜^ノ梧^ノ 五^ノ柞^ノ 兔^ノ 太^ノ

にほよの古橋をぬる夜がしこ
あゝえそ二日物いぢぬ事
置の鯛たきそ魚もろくも
鶴乃かそく石もかろくこれ
世の菫をさげき流る衣川
公腹しそて後乃長生
袖より多郭巨る釜の抽ひし
宿車所のさむき 鱗

太 兔 拵 拵 兔 太 拵 拵

かき月をさそく月乃古紙つ
経績をく。船の浪る勢
川婦し小なや老る花乃橋人
小鮎をさみそ向ふ罫置
目と西よめくりて的乃をわは
るをとり。無大仙の棟
目あれぬや小判の階をむ
二代はく。ぬ七乃名人

拵 太 拵 拵 兔 太 拵 拵

六有

五有

さゆひひんるの仕たてく鞆院
高 藤 垣もよて飯の籠外状
な由中子紐とくく記玉もはま
こひと云 中 斤 木 ぶ ち と ち ぎ
置るの外に雨す川 草あをり
きれ履まきよし母く物る居
迷ひ子の室由く月ふあうあひ
皆 去 川 ありと雪方の濡きぬ

兔 拵 太 拵 兔 太 拵 兔

^{ナリ}
弱の右穂為林ちきむとひりり
くくーのやうまんあるう法を重
引る屋き子とくさく大八分
とや 房 檜 も ち ち ち ち
子籠の鞋とちわをふまはるの字
所乃 裏あく舟のいとあふ

兔 拵 太 拵 兔 拵 拵

好日菴真行

蓼太

厚り船子や月の中より居るを
 此年男と拵ふ松色 免町
 梅柙多ふ味菴さうぬく年 南爪
 駄荷を追込 園乃下口 信賀
 ぬる欄を日の終さふ迄たつら
 所走乃果と 庵らすまは 玉江
 王 庖

表奥地の新後まー下ふかろ縁 町
 ちとあきつれと西の大寺 太
 榎借き足喰ふ茶鞋履走一 賀
 拐つゝののさゆえ結るを 爪
 園より乃危及ふ徳と親ん 庖
 毎の扱まのの味石のく 江
 ゆくあふ月を懐さぬ葉掛ふ 太
 年頁の卵乃荷みさる 断

走じつと君うは先の露拂ひ
 大盃を袖巾一くきり
 隠庵さう方なく志よ明を
 白ん乙多う了替れぬ
 春の海鬼なき山よ船を
 兜乃巾一換し銀砂利
 傀儡の麻乱髪をよりう
 挿乃娘今世より事

江賀 卮太賀 江卮 卮

翠簾越よお母と花も
 紅葉もと透く山魚のか
 新物く三里あまうハ
 積を右移れたいつの
 あさりの待合とや挿
 いつくも秋の嘆氣さ
 乙川さうと錦着海て
 移たりの出さる古酒乃

太町賀 卮江卮 卮

ナリ
 大さの人もさるぬ草如とん
 事やさぬ指の美代をまき
 梁よ起よくとさるれ鶴
 同ハ鈴麻の如もまき居る
 花ぬ間と杖束花の都まき
 家よ六人驚き乃交
 江 卮 太 瓜 賀 町

潮花樓真行

蓼太

秋風や薙刀はうさあつる海
 城かくやくとさるより一の舟
 至の中ゆく丁の教尼えさ
 られ争深るむまろをなむけ
 家かこ俄ありの雲ちきれ
 以ハ田くえの志盛なり
 故友 五三 恭義 卜尺 蓼坡

枝折戸ハあれど困居りて垂人
樽持てある 憾 隣 中
言わゆる 糸合まらの 後 故 友
禿 ぞ しく 君 々 名 を きく
く ち ち ち 暮 永 の 後 の ち 建 胤
茶 祿 日 乃 風 々 布 寺
斤 枝 の 凌 青 さ 吹 々 松 の 月
そ ね 々 々 々 々 又 八 石

坡 尺 三 友 尺 義 太 坡

は 道 を 始 々 駕 かく 抱 々 空
聖 々 階 層 々 不 二 の 雨 々 々
風 鈴 も 嘯 々 花 乃 忘 々 々
葉 不 々 々 々 々 杏 の 瓊
大 名 々 の うれ 々 々 喜 乃 育 々 山
祿 鞠 々 々 眠 々 々 々
埋 火 の 聲 々 不 の 光 々 々 々 々
手 形 々 々 け 々 々 園 の 香 々 々

太 坡 三 友 義 太 友 三

又人んさるゝの女乃品さるゝめ
 かいほくともさるゝ糸の行葉
 さるゝかりの糸を刺す推もせよ
 さるゝ入るゝある面のたれへお
 むの酒乃俵をい使えよんせや
 糸又遠き家のくさるゝ牛産
 糸月のひりりとくぬぬもさるゝ
 糸うさよせてねえさるゝえさる

尺 坡 義 太 友 三 尺

文やむさぬまをさるゝて唱子縄
 糸うさるゝたるむさるゝ街尺
 糸さるゝぬの袖をひるゝ
 玉さるゝさるゝ糸盤一面
 糸れくと日糸さるゝのたれへし
 百子所田よるゝ苗代

三 義 坡 尺 太 友

雪洞菴真行

蓼太

雪や月の星のと日和あは
 様を免くも人まよき
 菜履ふまきまを踏まよき
 いて半子午獲あれう
 二三尺圍炉裏の楯のよふたをり
 さくふもなき雪乃志お中
 如帆
 亀洲
 阿人
 陽馬
 牛飲

此舟小下戸の舟もあはき船はれ
 懐病神や襟ふはきまむ
 四つ五川さく日の飛分限
 比とありれよ襟乃出をの里
 顔手髪おむつあはる候なうら
 葎尺よ子子志のよ一原
 三日月を鞘のさくら乃小船先
 陸風呂好き乃きえひあしも
 夫水
 洲
 帆
 太
 人
 馬
 飲
 水

門前の秋も旅子智慧院
 大工を急ぐ拍る速い見
 花もまよひぬるによつとよつとよつと
 追ふ物乃うたしやひき
 十
 簀の女子春の雨をき
 今海舟人ももたむく
 飯橋のかも瀬川のゆも
 年は稀なるを樂乃おれ人

洲帆太人馬飲水洲

うはひの小天眼鏡をか
 荷を小喜乃南がえ
 もとととととととととと
 無銭西位と入る位も
 双成のかくす河のまのもれと
 由法をくくハ雲のくも
 風をるる月より下乃落走く道
 銀河流く希きの流

馬帆洲飲水人太帆

十一
 笠巾して戻る盥の途ありひ
 吐とをなす一尼乃年あら
 多たきとる取のがよ翠簾屏風
 旭平むより銚子かきけ
 ちやくと花の由慶乃扇をよ
 一時よ来る東風の初との
 執筆 人 洲 水 飲 太

振々亭真行 十三夜

聖満月とを忘さす名流は
 鶴とみきりあつまの松 三駱
 美ちの如秋の花摺紙のえて 武鳥
 太刀拵ひり側さるひ之 太
 新ら向き噴き出る鼻よりら 駱
 海貴り流る水氣争この水 鳥

七
言のたゞを詩題とての文を和
ま由律法乃相識はきあひ
傘控をまよひとてく既破ま
元子夫婦まよひ念点も字
破り夏のやま道し無傷ま
脚より寂しよ鳩乃夕くれ
十六おれ月まの法華深まの
翁和尚の糧と八米穂

大 鳥 太 駱 鳥 太 駱

十
阿しふるまよひとて今鳥
牛法繫まよひ入らち
吾ひの花のまよひ抱まよひ
園ちりくふちり日一輪
風まよひ帆と十分まよひ袋
謡まよひのまよひ阿彌の神如
まよひのまよひ鳥のまよひ入
深まよひのまよひ疾まよひれく

鳥 太 駱 鳥 全 駱 太 鳥

摘的とてあまの月影も
夏のことせし仙境に出る
川さく入ればと破るは
湯屋よとあまの具津さ
花退るも鏡の巨艦乃老
うなりとまきく院色を
苔むしてまの清き暮れ
泊人の如く穂巻を何と

全太鳥駱太鳥駱太

志のついでに
おまの
暈の遊月をよく錦歩障
音響するを
此もとも
糸動日

全鳥駱太鳥駱

芭蕉菴真行

蓼太

杜若橋越さるる嘆りりり
 善草原よとや御所能曝 月知
 難乃尾小虫にさるるの種言 全
 羽織と匂子菜少の折く 太
 月さるるの連さるる不折 全
 世々の氷乃今またく 知

紅葉さるる深林能橋さるれ 全
 此情如さるる如さるるの安 太
 何来乃京果如さるる持つる 知
 回橋り 梅子乙女百人 太
 媚さるる上子あおにさるる 知
 大姐板不執費乃さるる似さるる 太
 月程さるる 渡治乃拙者 知

醜⁺了⁺の⁺か⁺あ⁺ま⁺は⁺鐘⁺多⁺ま⁺と
 拙⁺者⁺を⁺尺⁺歌⁺に⁺入⁺さ⁺ま⁺り
 尖⁺角⁺と⁺花⁺は⁺和⁺く⁺九⁺折⁺
 櫻⁺三⁺弦⁺小⁺茶⁺屋⁺の⁺糸⁺ゆ⁺綿⁺
 鶯⁺も⁺化⁺さ⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺
 ま⁺の⁺桐⁺壺⁺は⁺恋⁺花⁺岡⁺に⁺
 砂⁺粒⁺海⁺の⁺浪⁺の⁺茶⁺籠⁺は⁺羞⁺ひ⁺
 う⁺の⁺花⁺も⁺此⁺の⁺如⁺く⁺も⁺儼⁺敵⁺
 知⁺太⁺知⁺全⁺太⁺知⁺太⁺知⁺

逆⁺了⁺桑⁺氣⁺の⁺ゆ⁺ら⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺
 ま⁺な⁺篠⁺子⁺乃⁺は⁺り⁺山⁺伏⁺
 襟⁺垢⁺花⁺も⁺以⁺積⁺ひ⁺つ⁺讓⁺あ⁺ま⁺
 酸⁺と⁺あ⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺ま⁺
 浮⁺の⁺浪⁺も⁺南⁺風⁺の⁺梅⁺乃⁺冬⁺ま⁺ま⁺
 豆⁺出⁺ま⁺居⁺も⁺次⁺子⁺の⁺月⁺ま⁺ま⁺
 知⁺是⁺乃⁺心⁺扇⁺控⁺り⁺控⁺子⁺ま⁺ま⁺
 外科⁺は⁺次⁺子⁺を⁺亦⁺も⁺姉⁺ま⁺ま⁺
 知⁺太⁺知⁺大⁺知⁺太⁺知⁺大⁺知⁺

古樹のそと芥のぬまき物とせ
貧乏守の移替さへく
夏之腐花の味香を返せる種緋
日無とあつとらふ年午乃因兩
花はらふとあつとらふ咲とらふ
後とらふとらふ春のあ上

太 知 太 知 太 知

雪午園興行

露の日を吉祥園に忘れき衆
浮無銭余は冬孤山松
三川居つ石風呂梅の痛ふけて
まゝの初地入るとは法とらふり之
華あれとあつとらふと月の教龜
羽織るるむ楷乃秋うせ

蓼太
黙我
鳩喬
山奴
我
太

小車の花乃教を葉内くく
 借く藤おの髪斗屋か先
 衝立此奥と志川ふ睡虎
 姉りふあつらふ時お本陳
 曲一手躑躅乃朋おとら
 物とせうと念者姉多あり
 武士の初家八懐乃月多て
 秋まゝ暑く岨能凌霄
 喬 奴 太 喬 我 太 喬 奴

穴癖ふ壘尻溜とほあす
 けけ飯の箸控さく山
 追風もちと云さうと船子丸
 先年園ある雛乃送花
 篠付ひさしとま雨はぬさのさふ
 雞細濠子女房ともく
 酒長い息を吸ふかと解傷を
 まゝ雪搔ぬ市の細さる
 喬 奴 我 喬 奴 太 喬 我

古葉堂真行

蓼太

名月孤照あそ遊る阿含りり祭
 回踏伸よふ芦の穂うき
 秋風中規式乃を芥らら初言
 馬帽子つき子親まを句
 月へのりさ相さ久日小晴をを紙
 道あ〜〜〜ま市の吉陽
 吐柳 啄雉 太 柳 雉

朝書と風和らふあ〜ららひ
 梅丁花七子多柄多ひく
 志とふれを悟らふ相居の女房達
 いてや男乃ふさ〜女を舞
 夕六して牛と蓼を〜さひ日年
 山ほ〜さひ史の阿〜男を
 了つ〜ふ昔〜紙襦さ〜まは
 廓〜貨子目利おりく
 太 柳 雉 太 柳 雉 太 柳 雉

云傳と川のくさり船
 秋とあつた月乃程芋
 孝ひ小胡葉の葉の花ゆき
 板とあつたあゆ降之
 新羅の使とあつた
 新羅の使とあつた
 新羅の使とあつた
 夏とあつたあつた
 魚文
 太
 太
 太
 太
 太
 太

舟君乃史の楫とあつた
 阿者乃史の楫とあつた
 後とあつたあつた
 唯今とあつたあつた
 寫とあつたあつた
 後とあつたあつた
 鳥丸とあつた
 太
 太
 太
 太
 太
 太

十
若くとは色色に清る秋の雲
聖子長官の琵琶絃人
朽々堂朝をあつる青子雨
却る山に暮る十日の夜はを
遠山とてしるあまの光の夜
朽々堂朝をあつる青子雨
雉 文 太 柙 雉 太

桃花窗真行

蓼大

年遷るとちかき秋の夜は月
麻酒の山より香くの秋
繪襖の衣は秋の夜は月
列々世に在る太鼓の音
湯底の小舟は湯底赤とおり
山々々々々々々々々々々々々
堂 牛 洗水 湖堂 千牛

於此所の隈もを神一がとら地
 能ふもと 所は好まふを無まる
 持向うは持此き必の小藤刀
 あうーとさるる雪此門口
 不のくとあ難炊まをりさの程
 後をらくと西月をなま
 川にけき今や月降木城山
 瓜一うーら玉者此義理
 水 堂 太 牛 堂 太 水

かねたも言同中阿のり
 ともあーあうーさうら三八
 およー中親子を花入南一駕
 まるまハ 踏ん松のまー濱
 憂うらまをるゆきさるの御扱
 喉^{ウカイ} 中 踏ぬの歯あうート
 うーあうー衣紋持るま出
 舞あうーらと文る九つ
 水 堂 太 牛 堂 太 水

仍く一ねの刀誠む
 母のふ契乃きを磨斗ま
 依徳のう江戸の暖簾をさあせ
 月をさくさくさくす
 お筆の海。大工の豆仕舞
 舟と隣との詞争ふ
 冬うけく又夜まきの種あ祭
 穠妻をさき月の下前
 牛 堂 水 太 堂 牛 堂

旅くとも一宇相横の白禪
 編瓦二本山く歌る
 竹枝一冊題入厨品を
 泊馬舟板きひえ歌
 思泊入大船五枚花さる
 百姓抱子睡月む別は
 牛 堂 水 堂 太 牛
 執筆

七拾三

六十二

雲地菴真行

蓼太

雲地菴真行
 某の尻と刺戸とゆゑさか
 肩と縷とと梅磨つて
 舟実の海を岩に束拈
 子交 雲冊 普成 太冊

秋風まを丸を巻く
 此程海をゆき多めく
 さかみしつて連のゆかり
 文を揚尾のしり 雲付
 立し物か子挿入の智
 風雪子に痛まを旅を
 川をぬき我理の芝を一日
 成 交 冊 太 成 冊 太 交 太

統控る側より多むる宗字に響
 射揚るの的は花の友なく
 細くと移むる月乃夕露
 まゝの如き山は天虫音も
 了らぬは因縁裏に下る枝の
 匂當りしに袖は古衣
 花表と夏心やふ五十兩
 皆我の心は彩地なつく
 成 交 珊 成 交 珊 成 交 珊 成

新波女と今と若きと筆山と
 煩惱則の談は家々
 掃きたる百も交入夕衣
 多は子孫は花子そく
 輝虎乃魂を空冷し
 山を海きる月乃月
 海と妙法乃大に偏は
 耳しりせく線は美思
 成 珊 交 成 太 交 成 太

三十四

六十五

十九
 折柳と帳陽と毒の如く
 日のくさねとさ 熱入るまを
 報復をいふまに 戻る
 磯列さうまじく 松の根より
 河湍と結文花の玉津山
 早く川をいり 春入るあまの川

太 珊 交 太 成 交

芭蕉菴真行

古柳のまをいり 葉の那
 魅不乃の小昔 花むき井
 花の子を去り 入海石は降きて
 旅のうきまをいり 旅とさつこ
 大さくは 影費のまをいり 月の秋
 家とち ちをいり 強るぬる 麦

太 羽 更 翠 侘 白
 太 鳥 翁 笈 白

蓼太

安房

更鳥

羽白

翠翁

侘笈

白

秋の風... 白太
白太
白太
白太
白太
白太
白太
白太
白太
白太

二十七年... 白太
白太
白太
白太
白太
白太
白太
白太
白太
白太

芭蕉集菴真行

蓼太

足下柄をくそのしき相心

下結

遠く大のぬらさるる

蓼醉

梅菊特陽能切さるる

鷺泊

月と油取の相のそらく

青牛

喰さるる西風入種を掃さる

汶上

水廻り船の秋能をく

太

繁舟のさざく大堰桂川 牛

帯を流さるるもり音子 泊

ひみろ中葉を扱能枝 太

穢法海一夜の夕くま 上

望人を詠さるるまは 碎

五尺の莖草やあま川さる 牛

定やくとまを流さるる月 上

例帯さるる飯を能色 碎

新しき秋の庭とありて水々
 道くはる。振舞入禮
 蓮の香はかきわたる花の香
 蝶は足入るはくまは秋
 庭まはりの花の影の波習ひ
 をく振くまはりの花
 拭きよむ振舞かしの玄園附
 佛の坐入るはくまは秋

牛 太 泊 上 碎
 牛 太 泊 上 碎

六月の影は下りて花を放し
 うさぎの影は下りて花を放し
 松の影は下りて花を放し
 花の影は下りて花を放し
 花の影は下りて花を放し
 花の影は下りて花を放し
 花の影は下りて花を放し
 花の影は下りて花を放し
 花の影は下りて花を放し

泊 上 碎
 牛 太 泊 上 碎

十
 中野の道草の記花源抄本
 一
 とくといふはまの年寄言
 枯木の枝
 或は花を吹く枝之葉
 春眠はるる花となく
 泊 上 太 執筆

芭蕉菴真行

常や十のつらみのおつら
 松尾のつらみのつらみ
 三尺とせのつらみ
 寧願はるるつらみ
 玉横のつらみ
 清くつらみ
 蓼太
 下総 都本
 芭蕉
 南枝
 龍和
 蓼

新艘の流るる拂ふ音なり
志正雨り空依の下祿宣
油氏やぬ阿やる扇乃結貨付
多乃よ晴まの魏結さるて
い事より乃舞よ拭巾已居る屋
物乃やちんと古ま刃さる
新風より僧馳急る安古輪
押やまらるる破さる糸との

本 和 枝 太 蓼 本 和 枝

阿のり(ま)草まらるる附とけ
長くやまらるる花の舞うま
まらるる月眉より君をまぬる人
和く風中結糸さるる
おのり流の袖まらるる蓼まらるる
色小くららるる陵結らるる
臨雲まらるるく乃流まらるる
口をまらるる多まらるる塞

太 和 本 枝 太 枝 蓼 本

1001

1002

妹ふりの源の流るるに
流るるに 長と推子 軸 幾
聖と皆為首の阿達なる強
掛棹とく子 山依の雲
雲とつと推子阿やのしる及ひ紙
きくし子あると熟柿喰さよ
手推るるにきくし月舟
河と推子流るるに門く

和太枝 本太枝 本太枝 和太枝 本太枝

おけ合小望の秋の秋
是の濃の葉と下らるる
百々守子あつとも果ぬ華若宗
名のこちの推子細き依保川
地と葉端あつとくしの雲
熊子何れくとの流るる

和太本 本太枝 本太枝 本太枝 執筆

芭蕉菴真行

蓼太

玄神也抱是道何持ありき
むき駒はきき 牧の日宮中
雷りるるらぬ雨乃そ不降言
風呂湯らとを旅のよまら
屏くおるるるるらひら此竹魚
廣まきし 庵くぬれ入初年 江
雷如 岷江 雷芥 下巻 柑翠

言の影らと垂せんまへの一かたけ
脊中を託まよふ子よそやく
侍る心言負能象乃きのよふ
此御年心康屏風と五双あうてハ
垂線又老の福川あつら
浪之せしと悟氣をとめる
稜菱小まつく咽孔月文そ
宇治の菅孔脊戸門可死
羣 如 芥 太 江 翠 太 芥

尺三寸一申
 一曲と詠をよまきと詠る
 幕越の母を礼と流るる人
 人きふくみ戸入春八
 立身とく子の目久く此筆は
 所くまきぬり十のむきまて
 お筆ハ今よりまきぬ神の吉也
 焼場とくまきぬ。此はか
 如江翠太芥
 如江翠太芥
 如江翠太芥

春をよまきぬ神の吉也
 焼場とくまきぬ。此はか
 立身とく子の目久く此筆は
 所くまきぬり十のむきまて
 お筆ハ今よりまきぬ神の吉也
 焼場とくまきぬ。此はか
 人きふくみ戸入春八
 幕越の母を礼と流るる人
 一曲と詠をよまきと詠る
 尺三寸一申
 如江翠太芥
 如江翠太芥
 如江翠太芥

七

七

七

世に中を養ひてありて障りて
 多しといふはついでに動電
 事申しおとすはついでに芥
 ぬきとすはついでに太
 曲ある花の津瀬き入人
 都一年ちかきよお花の春
 執筆

芭蕉菴真行

踏と山を色に照し筆の松
 巢も中を養ひてありて障りて
 一とくはついでに動電
 や多しといふはついでに芥
 入梅晴る厚風かこく法然
 能くもついでに動電
 圓志

蓼太

安房 眞貞

如泉

花六

雨竹

圓志

御後のままししけけのの君を取らやー
事ハ若うのと佛を山を入る不
飯を取らるを本を頼るを
内造他のままここ 銘居
少長の男山のり城京のりり
かさーーのおままのお一日
山霜花を流すままのお入る月
看まままのまままのあまま
泉 六 太 志 竹 泉 慶

ろろのろとと我をあまるるの丸裸
むむろろ帆をささるる夕夕風を舟
細川得るままのま花をむむ鳥
ままのまのまままのま列あり
かかのかのかのかのかのか
若子那那風をままのま陽を
泉 太 六 貴 竹 志

五字の物語のColumbusのColumbusのColumbus
集りて来仙一帖を我子と作らるる。Columbus
後のColumbusのColumbusのColumbus
言中一部のColumbusのColumbus

蓼太

今、法を一字と法は主生の様

時一子花の船は波は静か 夜兔

足根より砂粒は如く 全

鉄炮をせきくぬき 全

雲を月の只とく 全

まじり口は如く 兔

お河の客は如く 太

人形は如く 兔

錦糸は如く 太

庚申塚を如く 兔

捕縄は如く 太

心は如く 兔

探幽の如く 太

兔 何れも高山のあや
 太 徳合と家と縁との誓い借る
 兔 文くりたるゆふ月能る
 太 釣竿の折くさく浦の秋
 兔 一 竿乃穂よ母ハ世ても
 今 望みの葉漬かぬ花を様する
 太 時斗をゆい〜ゆい〜文の
 兔 塩灌能 再世とらふ小賢らき

太 よわぬ首尾の三日つとく
 兔 朝草吹く〜流あせ能妹春山
 太 湯とちるあふは夢回神立
 兔 意子あもさ〜麻子のああき
 太 仕る隙を故望 志を〜を
 兔 荳蔻の合衆の紙を冷メる
 太 比庫乃あふ文〜さし
 兔 物習子と流り〜能月と筆硯

十通

八十卷

言及しむあり形七曲に
 内又能通し里部と云々の事
 とくく在也其貴くある
 難し七世ハ何そいを
 其海風より炭俵の風油小
 子ありと云ふくや
 系通しと云ふ事

その際の上を借し候なりと
くれば余は解もいふ事なきふ
るこゝろ業なきりるを都のあり
ゆへに白川の産う種りてを
解た只其終りて余の能
おすしゝ志ありふ而已

玄峰
魚文

俳諧書肆

本石町二丁目
西村源六

文庫部 第一冊 第五

